

第77回車座集会意見交換内容（多摩区）

- 1 開催日時 令和7年11月30日（日） 午前10時00分から午後12時00分まで
2 場 所 専修大学サテライトキャンパス
3 参加者等 参加者28名、傍聴者10名 合計38名

＜開会＞

司会：定刻となりましたので、ただいまから第77回車座集会を開催いたします。

私は、本日の司会を務めます多摩区役所企画課の佐藤と申します。よろしくお願ひいたします。ありがとうございます。

今回は「3大学と地域がつながるまちづくり」をテーマに意見交換を行ってまいります。

初めに、行政からの出席者を紹介いたします。

福田紀彦川崎市長でございます。

市長：おはようございます。よろしくお願ひします。

司会：佐藤直樹、多摩区長でございます。

区長：おはようございます。よろしくお願ひします。

司会：それでは、福田市長からご挨拶を申し上げます。市長、お願ひいたします。

＜市長挨拶＞

市長：改めまして皆さんおはようございます。

日曜日の朝ということで、貴重な時間をいただきて本当にありがとうございます。

この多摩区と3大学連携が始まってからちょうど20年ということで、いろんな取組をこれまでさせていただきましたけれども、さらにこれからどうやってもっと地域とつながって、お互いがいい関係をつくっていくのか。国のほうでも、大学ももっと地域に連携しなさいというふうな話もありますし、私たち川崎市は非常に元気なまちですけれども、課題はたっぷりあるということなので、どうやって大学、そして地域、行政と一緒に地域の課題解決と、それから、知の拠点としての大学というものと、どういうふうにうまく連携していくかというのは、私たちにとってもとても大事なテーマだというふうに思っています。今日は3大学の教員の皆様、事務局の皆様、学生さん、それからSDCというふうに関係者が一堂に会する、なかなかこういうケースはないと思うんですけれども、それぞれの大学とということじゃなくて、みんな3大学が一緒になってどういうことができるのかというその可能性についても探っていきたいというふうに思っています。ぜひ、今日で何か結論を出すということではないので、今日をきっかけに次のステップへ次のステップへというふうな形で進めてまいりたいというふうに思いますので、短い時間ですけれども、どうぞご協力のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

司会：福田市長、ありがとうございました。

＜参加者紹介＞

司会：次に、参加者の皆様のご紹介をいたします。本日は、多摩区にゆかりのある3大学、専修大学、明治

大学、日本女子大学から大学事務局、教員、大学生の皆様に加え、区内で地域活動団体等の中間支援やまちの広場創出支援等を行っている多摩区ソーシャルデザインセンターの方々にもご参加いただいております。ご参加の皆様につきましては、こちらからお名前などをご紹介いたしますので、その場でお手をお挙げいただければと思います。また、お手元の資料、3ページから4ページに参加者一覧がございますので、併せてご確認いただければと存じます。

それでは、お名前を読み上げさせていただきます。

専修大学ネットワーク情報学部教授、佐藤慶一様。

佐藤さん：よろしくお願ひします。

司会：専修大学ネットワーク情報学部教授、石井健太郎様。

石井さん：よろしくお願ひします。

司会：専修大学経済学部教授、鈴木奈穂美様。

鈴木さん：よろしくお願ひいたします。

司会：大学の先生から読み上げていきます。明治大学理工学部建築学科教授、山本俊哉様。

山本さん：山本です。よろしくお願ひいたします。

司会：日本女子大学人間社会学部社会福祉学科教授、黒岩亮子様。

黒岩さん：よろしくお願ひいたします。

司会：日本女子大学建築デザイン学部教授、薬袋奈美子様。

薬袋さん：よろしくお願ひします。

司会：次に、大学の事務局の方です。専修大学学長室長、二宮進語様。

二宮さん：よろしくお願ひいたします。

司会：明治大学総務部生田キャンパス課課長、福岡英朗様。

福岡さん：よろしくお願ひします。

司会：明治大学社会連携事務室、石塚実様。

石塚さん：よろしくお願ひいたします。

司会：日本女子大学学務部社会連携室課長、水沢剛様。

水沢さん：よろしくお願いします。

司会：次に、学生の方です。専修大学ネットワーク情報学部3年生、前川統様。

前川さん：よろしくお願いします。

司会：明治大学ボランティアサークルLINKs 3年生、田中秀磨様。

田中さん：よろしくお願いします。

司会：明治大学理工学部建築学科卒、現千葉大学大学院、藤巻胡桃様。

藤巻さん：よろしくお願いいたします。

司会：日本女子大学文学部史学科2年生、大塚千寛様。

大塚さん：よろしくお願いします。

司会：次は、多摩S D Cの皆さんです。阿部菜月様。

阿部さん：よろしくお願いします。

司会：富長勇哉様。

富長さん：よろしくお願いします。

司会：仲西駿様。

仲西さん：よろしくお願いします。

司会：堀川華那様。

堀川さん：よろしくお願いします。

司会：蒲菜南様。

蒲さん：よろしくお願いします。

司会：そのほか、本日のファシリテーターは多摩S D Cの方々にお願いをしております。また、グラフィックレコーディングの皆様にもご参加いただいております。後ほどご紹介がございます。

以上でございます。

それでは、皆様、本日よろしくお願ひいたします。

＜本日のねらいの説明＞

司会：続きまして、本日の目的、進め方等について説明をいたします。スライドの6ページをお開きください。前方のスクリーンにも投影しております。

多摩区では、区にゆかりのある3大学の知的資源と地域社会の連携に向けて協定を締結しており、20年間にわたり取組を進めてきました。具体的な取組として、教員の先生方が授業や調査・研究を通して地域の方々と連携し実践を行っていただく大学地域連携事業、学生の皆さんのが地域の方々と交流し地域活動を体験する事業、通称たまなびのほか、3大学と地域の交流促進を目的とした3大学コンサートなどを行っております。この20年間連携する中で様々な課題が見えてきているというふうに認識をしております。

主な課題として、大学の事務局の皆様からは、行政から来年度の連携事業の募集依頼が年度の遅いタイミングであるため、連携事業を準備する時間が足りない。教員の研究内容などの情報整理が必要といったご意見。教員の皆様からは、学生が卒業により入れ替わるため、ゼミなどでのプロジェクトが継続しづらい。研究や授業で地域と関わるには地域との関係性づくりが必要といったご意見。あと学生の皆様からは、地域とつながれるきっかけが欲しいがどうしたらいいか分からず。地域とつながる際、単なる労働力として扱われるのではなく、自分たちの頭で考え、自分たちの世界が広がる活動がしたいといったご意見。多摩ソーシャルデザインセンターの皆さんからは、中心的に活動できるメンバーの数が減っている。連携や支援の対象をさらに増やしたいといった課題を伺っております。そして、行政としても、地域の課題解決に資する大学と地域のマッチングを一層進める必要がある。地域課題をより一層把握していく必要があるといった課題があるというふうに考えているところです。多摩区と3大学の連携方法を現状に合わせてブラッシュアップする必要があります。

資料の7ページをお開きください。そこで、本日の車座集会では、各主体間の効果的な連携を促進するために、具体化したいアイデアを関係者で整理することが狙いとなります。本日整理したアイデアについて、今後、各主体の皆様で具体化に向けた検討を進めまして、新たな取組の報告とさらなる連携に向けた検討を次回、来年度の車座集会で行えればというふうに考えております。

本日の車座集会の目的についての説明は以上です。

＜ワークショップ①＞

司会：では、ここよりワークショップに入っていきたいと思います。ワークショップの進行につきましては、多摩区ソーシャルデザインセンターの角谷さんに行っていただきます。

それでは、角谷さん、よろしくお願ひいたします。

角谷さん：角谷でございます。おはようございます。ありがとうございます。

2年ちょっと前の車座集会をきっかけにカラフルカフェというのが、マイクを、ありがとうございます。すみません。どうもありがとうございます。

2年ちょっと前ですかね、車座集会でカラフルカフェというのが生まれまして、それを今2年間ぐらいやっている、私、角谷と大野さん、それからムラケンさん、村田さんの3人でテーブルのディスカッションをサポートさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

それから、冒頭ちょっと話がありましたけど、立ち位置が難しいですね。皆さんのディスカッションをこの絵に、ここに絵にしていこう。グラフィックレコーディングというのを今日やってみようということになつてまして、通称グラフィッカーという言い方でいいですか、岡田さんと肱岡さんと、それから斎藤さ

ん、歩き回って皆さんの話を聞きながら、それは絵にするためですので、温かく見守っていただければですかね。よろしくお願ひします。

では、どんどん行くので、ワークショップの心得というのを少し冒頭、改めてなんですが、否定はしない。まずは受け入れられなくても受け止めるというのは多分できると思うので、否定しない、まず受け止めましょうという形でやっていただくとよろしいかなと思います。それから、話を遮らないで、ぜひ最後まで聞きます。そんなのりで行きたいです。なので、話す方はできればなるだけコンパクトにお話しいただくとよろしいかなと思います。それから、自分事ですね。私はこう思うという形で発話できるととてもいいと思いますので、評論家的ではなくて、自分はどうする、自分はこう思うという言い方ができるとよりいい場になるのではないかなと思っておるところですので、皆さんぜひそんな心得でいい時間にしたいなと思うところでございます。

よろしいですか。よろしいですか。よろしいですね。はい。

さあ、そうしましたらワークショップ、30分強と、これ、見えないですよね、渡すと。どこがいいかな。ここがいいかな、ここがいいですね。「大学と地域の連携について」まず30分ぐらい議論した後に席替えをしまして、今度3大学同士の連携と、今、大学別に座っていますので、2番は大学が混ざる形で席替えをします。席替えお願ひしますと言いますので、皆さんスムーズに移動していただけると非常にうれしいです。よろしくお願ひします。

大学と地域の連携からスタートします。両方ともステップとしては、意見交換をまずやって、それを全体で共有をして、それから市長のほうから、福田さんのほうから1分間ぐらいでコンパクトにということなんですけど、すみません。ごめんなさい。そんな形で進める30分、30分ということになります。よろしいですか。ステップごとにあれしてください、これしてくださいというのをお願いしますので、大枠こんな感じだということでございます。

では、第1幕ということです。大学と地域がどう連携するとみんなハッピーになるのかなというテーマになります。大学と地域の連携ですよ。

今、大学ごとに分かれていますので、専修大学さんと日本女子大学さんは大学との知見を地域にいかに還元するのか、何をどう還元するのか。そして地域を研究のフィールドにしようよと。これについてお話しをしてください。そちらとこちらですね。それから、明治大学、私がそこに入りますけど、学生によるまちの課題解決、活性化。多分L I N K sの方々とか、実際に活動されていると思うんですけど、学生によるまちの課題解決、活性化及び多摩S D Cの人材確保育成と、この辺のところの切り口でお話をしていただくということになっておりますので、よろしくお願ひします。

今からもう20分割っているんですけど、私のほうで時間いっぱいですとお願いしますけれども、ここにワークシートがそれぞれのテーブルにあります。ちょっと確認ください。ワークショップ①と書いてあるやつですね。大学と地域の連携、テーブルごとにテーマが違いますので、それも書かれています。そして、事前に皆さんにインタビューをさせていただいたことをそれなりにここに書いてあるということになっています。課題解決のアイデアとしてこんなことが考えられるよと。今日はそれをより具体的に何をしたらいいのかなという切り口、自分は何しようかなみたいなところで、より具体的に何するのという話をいっぱい出していただくということになります。それをその後、テーブルごとに発表いただきますので、発表者も決めつつ進めていただきます。発表者は決まっていましたっけ。

事務局：決まっています。

角谷さん：はい。ありがとうございます。決まっていますので、その方は意識してください。よろしいですか、やること。ディスカッションしていっぱいネタを出す。付箋にいっぱい書いてください。そして大学ご

とに発表してください。福田さんコメントくださいという流れになります。

では、テーブルごとに始めてください。どうぞお願ひします。

(ワークショップ①)

角谷さん：それじゃあ、皆さんそれぞれ盛り上がれましたでしょうか。アテンションプリーズということで、スライドを見ていただければと思います。

発表時間ですね。意見やアイデアを全体に共有してください。発表される方はどなたですか。ちょっと手を挙げてください。じゃあその方に託してなんんですけど、そんなに責任を感じる必要ないということで、発表者さんが印象深く思ったことを言っていただければいいですし、何かグループのディスカッションをまとめて発表しようとしなくてよろしいかと思います。各グループ、4分ぐらい目標で、4分ぐらい目標なので3分で鳴らします。よろしいですか。

じゃあどこから行きますか。おお、我こそは。次はどっちに行きます。どっちに行きます。こっち、じゃあこっち。最後なんで落ちちゃんをつけないと。オーケーですか、分かりました。

では、そちらからマイク行っていますか。じゃあここに一応3分でピッピッピと鳴りますけど、4分間しゃべっていただけます。どうぞ。

前川さん：専修大学チームから出た話としては、学生と大学の教員の人たちから、それぞれ活動している内容があって、もっと幅広く活動したいとか、いろんな人とつながって活動したいという要望はすごくあるんですけど、それそれがつながる場所がなかったり、お互いの活動を知る場所がなかったりするというので、広がっていかないとか、新しいつながりが生まれないという課題が複数出たかなと思います。

1つアイデアとしては、それぞれお互いの活動のメリットを持ちながらつながれる形だったり、整備とかネットワークが欲しいなというのと、つながるためにお互いが何をやっているかと、今の活動とほかの団体とつながって何をやりたいかというのがもっと分かりやすく見られればいいなというのがアイデアとして出来ました。

それぞれ学生は学生で、大人は大人でいろいろな情報だったり資源を持ってたりするので、それをもつとうまくつなげれば、活動が広がるだけじゃなくて、もっと活動に深みが出たりとか、別の視点がもらえたりとかすると思うので、そうですね、一番のメインで出ていたのは、もっと分かりやすく情報を知りたいとか、団体をつないでほしいみたいなところがあったかなと思います。

角谷さん：まだ1分ぐらいありますからどんどんしゃべっちゃってくださいね。

前川さん：今、何か情報を知るのは、実際にネットに上がってたりとか、調べたら出てくるんですけど、それが何だろう、調べにくかったり、あり過ぎて見つけにくかったりとかするかなと思っていたりとか、僕のやっている学校の中のほかのゼミだと、別にほかとの協力を必要としていないよみたいなところもあったりするので、そこをもうちょっと分かりやすくなれば、先生方も見つけやすいし、地域の人も見つけやすいし、学生も学生でウェルカムですよみたいな、つながりをもっとしたいですよという団体が分かれれば、より連絡が取りやすくなったりとか、新しいつながりをつくりやすくなったりすると思うので、そういうのが見やすかったり、見つけやすくなる場所とか、システムが欲しいなと思っています。

角谷さん：ありがとうございます。

ちょうど3分ということなので、あと1分間あるんですけど、グループの皆さん、補足があれば差し込ん

でください。ぜひお願ひします。どうぞ、どなたか。なければ先に行っちゃいます。

あと40秒です。マイクをお回しください。

石井さん：出なかった話合いの中身として、地域のリアルなデータも大学側で使ってもらえるといいんじゃないかという意見もありまして、先ほど言ったようなマッチングの中で、データが大学側も得られるというふうになつてはいるが、何かうまく回るんじゃないかという話があつてという話があります。これは話の中で出なかったんですけど、私がちょっとだけ思つてはいるのは、行政からもそういうデータがもらえるといいなという。

角谷さん：欲しいですね。

石井さん：市民団体とかのデータもリアルなデータだと思うんですけど、行政も出しているとは思うんですけど、ホームページとかには。そこがつながるといいなというのが追加です。すみません。

角谷さん：ありがとうございます。

データは活用したいですよね。ありがとうございます。専修大学さんの発表ですね。ありがとうございます。パチパチパチですね。

では、次、日本女子大学さんでしたかね、お願ひいたします。

大塚さん：私たち日本女子大学チームは、主に地域とつなぐための拠点というのと、学びにつながる取組という2つの大きなテーマで考えました。

地域とつなぐための拠点というのが、長く長期的に続くものというのが大事なんじゃないかという話になって、大学も行政も地域の組織というか、地域もやっぱり人が異動とかで変わつちゃつたりとか、学生も入れ替わつたりとか、そういうのがあるので、入れ替わりに動じないというか、そこに影響されない1つの長期的な拠点が必要なんじゃないかという話になりました。それで、広報という点で考えて、広報はバーチャル、ホームページとかSNSとかの広報もあるし、リアルな場での直接的な広報というのもあるよねという話になりました。

あと、次の学びにつながる取組というのが、地域が求めているというか、地域の余裕がある時間と学生の余裕がある時間というのがやっぱりなかなか違つてくるところがあるので、そこが学びにつながる取組をする上で地域側と学生側でなかなか課題になる点なのではないかという、時間の部分でそういうところがあるんじゃないかという話になりました。

角谷さん：まだ1分ぐらいありますよ。プラス1分なので2分あります。

あるいはほかの方にマイクを回しちゃうという作戦もありますよね。チームメンバー助けてあげてください。

薬袋さん：すみません。横から失礼します。

例えば、今日、皆さん、この場はすごいすてきだなと思うんですけども、こういうところで、先ほど私はチラシを事務局にお渡ししたんですが、届きましたかね。社会実験をやつてはいるんですけども、例えばそういうのを宣伝していただけるプラットフォームなんかがあると、大学としてはとっても助かります。すごくそういうところにエネルギーを使わなきゃいけなくて、研究とかに使うエネルギー以上に地域との連携に使わないと始まらないというところを少しサポートしていただけると、本当に分析とかそっちにエネルギー

一を割けるようになるなと思っています。

角谷さん：はい。ありがとうございます。後、でもまだもうちょっとあります。

黒岩さん：具体的に宣伝というところもそうなんですけれども、やっぱり地域の課題一覧みたいな、そういうものを出して、何かお互い共有したいねという話だったり、あと、学びの場とか、共有というところでは、例えば学生が違う大学に訪問するとか、地域の人が訪問するみたいな、そういうのをやってもいいし、何か大学の中でカフェみたいなをやって、いろんな方たちがやっぱり日常的なリアルなところも生かしながらバーチャルなものも使っていくというふうに多層的にやるとかなりいいし、学生たちも楽しんでできるんじゃないかなというふうに、ここではいろいろなお話をさせていただきました。

角谷さん：ハイブリッドということですね。

黒岩さん：ハイブリッドです。

以上です。時間はどうでしょうか。

角谷さん：大丈夫ですか。

黒岩さん：もう少しできますか。

角谷さん：残念ですけど、一言どうぞ。いいですか。

水沢さん：そうですね、いろいろ話が出ましたけれども、行政と大学の連携は、やっぱりよくも悪くも人のつながりなので、人というのは入れ替わることを前提とした長期的なつながりを維持するための仕組みというのがリアル、バーチャル、双方であるといいなというような話が出ました。

以上です。

角谷さん：ありがとうございます。

人がやっぱり大事だけど属人化しないようにしたいねという感じでしょうかね。ありがとうございます。最初に発表をいただいた方を含めてありがとうございました。

では、大トリの、お願いします。明治大学チームですね。お願いします。

藤巻さん：明治大学チームから発表させていただきます。

私たち明治大学チームは4点にまとめてお話をしました。1点目に情報について、2点目に予算について、3点目に関係者の交流について、4点目に課題の地域からの提案についてを話し合いました。

1点目の情報という点ですと、情報量が多いということや、学生側が飛ばしてしまうような情報がかなり多いのではないかということが挙げられまして、対策としては量の制限だったり、グルーピングして調べられるようなものだったり、検索をかけられるようなものがあるといいなという話をしました。また、やはりメールだったり、何か媒体によっては文字情報だけで来てしまうものがあるので、そういうもののビジュアル化があるとすごく分かりやすいし、興味を引くのではないかとなりました。

2点目の予算についてですが、こちらは、まず助成金というのが挙がったのと、それを出していただく元として、地域だけじゃなくて、地域にある企業の方が応援してくださるような企業があるのではないかなど

考えました。

3点目の関係者のつながりに関しましては、地域課題について考えるようなものだったり、イベントの開催だったり、何をやっているのかがお互いに分かるとやはりいいなということが挙げられました。

4点目の地域からの課題の提案という点ですと、やはり学生側の自主性を尊重して行えるといいなということと、そうはいってもあまり負担が大きくないうがいいのではないかなとなりました。

以上です。

角谷さん：ありがとうございます。

まだ1分半ぐらい、プラスなので2分ぐらい残っていますけど、ぜひチームの方から補足、あるいはもう一言言っておきたい。ぜひ、じゃあ田中さんが行きますか。お願ひします。

田中さん：ありがとうございます。情報は何かやっぱり僕も見飛ばしてしまうところがあるんで、やっぱり多過ぎて、まとまつたり検索がかけられたりする量がいいと思います。またイベントにつきましては、例えば春に先に行われるたまがわマルシェであったり、そういうことだったり交流だったりができたらより一層、もともとあるイベントですので簡単にできると思いますので、区民祭や例えば地域のお祭りだったり、そういうのも使っていけたらいいなと個人的には思いました。

角谷さん：次の人に、ちゃんと自分の曲を入れておかないとどんどんマイクが回ってきちゃいますから。どうですか、でも本当に時間、せっかくあと1分ぐらいありますけど、ぜひ個人的ご意見でも全然構わないですね。

福岡さん：そうですね、あとは、今、区民との関わりにありました区民祭とかあれだけ区民の方が来られているんですが、あんまり企業のブースとか大学のブースがなかったので、そういうのも、そういうところで交流できるんじゃないのかなとは思いました。

角谷さん：プラス1分です。あと、どうですか、ぜひぜひせっかくですから。

堀川さん：多摩SBCの堀川と申します。

今、お話をありましたけど、私たちも多摩区民祭ですとか登戸・たまがわマルシェとともにやらせていただいて、そこに私たちも出展をさせていただいているんですけど、ぜひ大学の皆さんですとか、あと大学の学生さんだけじゃなくて、事務局の方ですとか、あと研究をされている方も、ぜひそういったところでデータを取ったりですかというところをできたら、区も盛り上がりますし、お互い知らなかつたことがやっぱり知れるのはすごくいいことだなと思うので、ぜひそういったところでSDCがつなぎ目となって地域と大学をつないでいければいいんじゃないかなというふうに今聞いていて思いました。ありがとうございます。

角谷さん：ありがとうございました。

では、明治大学さんチームの発表を終了ということで、それぞれの大学での意見ということを全体で共有したということですね。大学と地域の連携のために何をしようか、何ができるかということですね。いろんな障壁とか難しいことはあるかと思いますけど、こうあつたらいいよねとまず考えることが大事だと思いますので、そんなお時間だったかなと思うところですが、最後に福田さんのはうから一言、お願ひします。

市長：ありがとうございました。何か私ももやつと思っていたことを皆さんに吐き出していただいたなどい

うふうに思っています。特に見える化とか、共有するための仕掛けといったところに皆さんすごくもやつとしているということが分かったので、次、これをどうするのかという形に移ってくるのかなと思いました。

以上です。1分です。

角谷さん：まだ大丈夫です。まだ30秒ぐらい大丈夫です。

市長：そうですか。いや、後で言おうと思ったんですけど、実は川崎市のSDGsプラットフォームを知っていますか。知らない。実は3大学、誰もパートナーに入っていないんです。というのは、今、川崎市のSDGsプラットフォームは、日本最大のプラットフォームになっていて、何と3,500の事業者の皆さんのが入っていただいているんですね。今、僕、検索して3大学が入っているかなと思って見たら出てこないので、多分入っていないんだと思うんです。ここで何が行われているかというと、もう駄目ですね。

角谷さん：しゃべり切ってください。

市長：これ3,500でどんなプロジェクトが生まれていますというので、これはすごい検索可能なんです。17のSDGsのゴールにキーワードを入れるとか、いろんな検索の仕方ができるんですけど、例えば、今、こども食堂といったら11社出てくるんですね。全部民間企業です。民間企業がどういうふうに取り組んでいるのか、あるいはこういう企画にサポーターを募集したいというチェックもあるので、それを私が何か関わりたいなと思ったらこれマッチング可能ですというように、幾つもの、何というか、大学だけの連携というふうにしていくのか、もっと企業だと市民の団体とかがつながるんだったらこっちのプラットフォームを活用したらみたいなのがありますよね。ですから、項目に例えば大学とかというふうなのを1つ加えてもいいかもしれませんし、何かこういうものでつながる仕組み、知らしめる仕組みというのは使ったほうがいいかなと。今どれだけ生まれているか、350ぐらいのプロジェクトがもう活動中なので、なのでこういうものも使っていくべきかな、まだ知られていないということにちょっと危機感を覚えました。

以上です。

角谷さん：ありがとうございます。危機感大事ですよね。ありがとうございました。

そうしましたら第1幕としては、大学と地域の連携を大学ごとにまず考えてみたというお時間でございました。

この次、ちょっと席替えをして、大学が混ざった形の座席配置になりますけど、席替えをスムーズにして、誰がどこに動く、動く人は分かっています。ちょっと事務スタッフの方、サポートいただいたほうがいいかもしれません。

じゃあ席替えしてくださいという声がけで大丈夫ですか。

(席替え)

<ワークショップ②>

角谷さん：学生のテーブル、大学事務局様のテーブル、先生のテーブルという形になります。どんどん動いてください。可及的速やかにお願いします。歓談とかしないでどんどん動いてください。ここに決まりました。ここは学生チーム、学生チームは收まりました。ここは先生チームですね。

座ってください。しゃべりますよ。やっていいですか。アテンションプリーズ。

ワークショップの2番、3大学同士の連携でもっともつといいことをやろうよということの切り口になり

ます。大学ごとにやることも非常に大事だとは思うんですけど、ちょっと3大学でどうするかと。あるいは2大学でもいいかもしないですね。大学間連携の話をしましょうということです。また、シートはありますか。ありますね。次のシート、ワークショップ②と左上に書いてあるシートを使います。

ここに既に皆さんからいろいろ情報収集させていただいたことに基づいて、連携するとこんなメリットがあるに違いないじゃんということと、それから連携してできること、可能性があることというものがそれなりに書かれています。結構文字いっぱい書いてあるんで、それを読みふけるとちょっとディスカッションにならないんですけど、その辺を眺めながらディスカッションいただきつつ、15分後ぐらいには3大学同士の連携案としてこの2つを推しだよね。この2つはぜひ推したいなというのを決めてくださいということです。仮決めということですよね。これも実現可能性とかあんまり気にしないほうが、効果とかメリットが多そうなことを書いていただければいいと思うんですけど、やっていただきたいのは15分後にここに2つ書いてくださいということです。その先の話をします。これを全部貼り出した後に、ここに6つのアイデアが出るわけなんんですけど、それに皆さん投票していただきます。みんなの人気が高いアイデアはどれかなというのを集めるということです。また市長からコメントをいただきます。

よろしいですか。やることは分かりましたか。もう私、15分タイマーを動かしているのでスタートなんですけど、やることはオーケーですか。自由闊達に、実現可能性とかはあんまり気にしない、予算も無尽蔵にあるぐらいののりで考えたらいいんじゃないかなと思いますけど、ちょっと無責任にしゃべっております。いろいろディスカッションしていただき、付箋なんかも書きながら、最終的には2つそこに直接書いちやつてください、2つ。オーケーですか。よろしいですか、では始めてください、どうぞ。

(ワークショップ②)

角谷さん：一応予定のお時間ではあるんですが、次のモードになかなか移りにくい雰囲気なので、議論を一旦そこまでにして、何か雰囲気としてはあれとあれが盛り上がった。こちらは大丈夫ですね、先生チーム。

今、あるテーブルがまだ書けていないので、ちょっとお待ちいただくんんですけど、これをこの後貼り出していただいて、もう2つチームは貼り出しましょう。どこに貼るのでしたか忘れましたが、貼ってください。それから参考までに、さっきのパート①はここに貼ってありますので参考までに。貼っていただいて、テーブルに赤色のマークシール、そういうのを何というんだろう、丸シールがあるので、1人に2枚、1人2票、今、3チームの文が並びましたら投票をしましょう。

ですから落ち着いているチームはもう貼り出されているものをちょっと読んでいただいて、席から立っていただいて全然構わないです。学生チームも立ち上がっていただいて、すてきな連携案に投票するということです。2票あるので2票丸ごと1案に入れてもいいですし、1個、この2つにしようかなでも結構です。

事務局委員さんチームが書き終わったら貼ってください。貼るのはスタッフがサポートします。

よし、これで3案がそろいましたので、皆さん立ち上がっていただいてわしやわしやしてください。

先生チーム、ちょっと立ち上がっていただいて、皆さんここへ多分大勢来ると思うんです、椅子を。

どんどんボードの前に集まつていただいて、投票し、投票が終わった方は速やかにお席にお戻りいただくといいなと思うところです。

あと2分ぐらいで貼り終わっていただきたいです。貼った方はどんどんボードの前を開けてくださいね。あんなところに貼ったろうとか、こんなところに貼りやがってとか、そういう議論はありませんので、ぴぴっと貼って、直感で。結構直感が皆さん大事なので、直感で貼ってお戻りください。

あと1分20秒で貼り終わると私がとてもうれしいです。いや、皆さん、素早いですね。すばらしい。

大分熱気むんむんな部屋になって、これは僕だけじゃない気もしますね。

薬袋さん：私さっきから言っているんだけど、この部屋はちゃんと換気できているんですか。インフルがはやっているからとっても気になるんです。

角谷さん：換気できているんじゃないでしょうか。

貼り終わっていない方はいますか。貼り終わっていない方。席につかなくても結構ですけど、貼り終わっていない方はいらっしゃらないですね。

私のほうから代表発表をさせていただくのりで行きます。多摩学研究・教育センターというのをやろうよと。これはもう既に既存ですか。これから。ちょっと数え間違っていたらあまりちょっと 10 票。

それから本当のキャンパス、本来のという感じですかね。オープンキャンパス開催、2 票。少ないからと いってよくないアイデアということはないと思います。

それから、学祭や地域イベントで 3 大学を回る機会、3 大学を回っていく、巡回するみたいなチャンス、機会をつくろうじゃないかと、5 票。それから、ちょっとこれ、誰か代表で数えてくれるとうれしいです。授業やゼミなど、共同プロジェクトに単位が出る正式な科目としてそういうのをやつたらどうかというの 11 票。

それから、これお願ひします。了解です。3 大学で得意分野を集結させて地域課題の研究を行って、そこに学生が主体的に関われるようになったらいいんじゃないかな。地域課題に取り組む研究、あるいは科目とかをやつたらいいんじゃないのというのが 13 票。

それから、学生や教員の交流の場、仕組みづくり、そうですね、仕掛けとしてちゃんとやろうよと。人の流動もあるでしょうから、仕組みとして整備したいねということかと思います。

こんな得票になっていますけど、あくまでも人気が高いものが絶対的にいいかどうかという話ではないと思いますけど、参考情報としてこんなふうになったということを発表させていただいた流れで、福田さんから一言コメントをいただきたいです。

市長：ちょっと次のコーナーでいっぱいしゃべりますから。

角谷さん：ああ、そうですか。

薬袋さん：補足していいですか。

角谷さん：じゃあどうぞ。

薬袋さん：ここに書いてある多摩学研究・教育センターの中にはこれが入っています。授業をやってちゃんと単位を出してあげようというのが入っていて、学生と教員の交流の場もある意味、ここの中に入れたいという趣旨なので、みんな考えていることは一緒だなと思いました。

角谷さん：ありがとうございます。

皆さん思いは結構共有を既にできているんだなということなのかなと思います。

ありがとうございました。こんな結果になったのがワークショップ②ということになります。よろしいですか。

市長はこの後いっぱいおしゃべりになるということなので、これはパスという。

そうしましたら、次の幕が大きな第 3 幕になるのかな、市長との意見交換というパートになりますので、私の役目はここまでということでした。大野さんとムラケンさんと、あとグラフィックファシリテーターの

メンバー、お疲れさまでした。どうも。

＜市長との意見交換＞

司会：角谷さん、どうもありがとうございました。

それでは、ここまでワークショップを踏まえ、参加者の皆様と福田市長とで意見交換を行っていただきます。

ここからの進行は福田市長になります。どうぞよろしくお願ひいたします。

市長：大分熱氣むんむんで、特にこちらの教授の皆さんたちの盛り上がり方がすごかった。学生さんの3倍ぐらい盛り上がっていたので、なかなかこういうことないんじゃないですか。3大学の先生方が集まってこれだけ盛り上がれるって、もうすてきな予感しかありません。ありがとうございます。

ちょっと私のほうからコメントというか、ディスカッションを通じて、みんなで今投票したところを皆さんでもうちょっと詳しく聞いて確認したいなというふうに思っています。

1つ大いに盛り上がったこの多摩学研究・教育センター、そしてこれは一緒だということなんですけれども、授業、ゼミなどを共同プロジェクトで単位がつくと。ここをもう少し補足説明、皆さんにちょっとしていただいてもいいでしょうか。どなたか先生でいらっしゃいますか。

薬袋さん：しゃべり過ぎて。今、日本女子大学というか、どこの大学でも共通教育科目というのが、教養とかつて呼ばれていたような科目があるかと思うんですが、何かそういうような枠組みの中に一コマ3大学の先生が、例えば3回とか4回ずつしゃべる、5回しゃべらなきや駄目か、ずつ分担でしゃべるというような授業がオンラインか何かであれば、特にこういう地域と多摩に関わるような研究成果とか、今やっていることとかがその授業の中で話されれば、こういう活動に私は参加したいとか、この研究に私も協力してみたいと思う学生がいたら、例えば自分の大学の先生じゃないところの研究室の先生のところに、例えば卒論を書くのを一緒にやらせてくださいと行かれるとか、何かそういうきっかけになるんじゃないかなというふうに感じています。当然それは単位を出さなきやいけないし、ちょっと言っておきたいのは、私たちの授業のやっていますよという負担のコマ数の中にきちんとカウントしていただいて、その辺のところで事務の方にご協力をいただいてお願いしたいなというふうに思います。

市長：ありがとうございます。

さあ、今、先生方からそういうお話、共通の授業、共同授業、単位も取れる。学生さんたちから見てどうですか。

前川さん：話合いの中で出たのは、ボランティアという掲示の仕方よりも授業となるとより生徒の参加率が高まって、単位をもらえるならやってみようとか、誰かと申し込んでみようみたいになるかなというのが1つと、授業となると、より意識も高まって、学生たちが一応成績がつくので、成績のためにとか、自分の目標のためにみたいな、やる気の向上にもつながるんじゃないかなと思います。

市長：なるほど、ありがとうございます。ほかにちょっと2人ぐらいちょっとコメントしてもらってもいいですか。どなたでも。

藤巻さん：私たちがまずこの意見が出てきたのが、日常的に連携する仕組みとイベントごとで連携する仕組み、どっちもあってもいいんじゃないかなとなつたことから出ています。なので、授業の連携だと、ふだん

から連携がでて、それがよいのではないかなと思いました。

市長：なるほど。ありがとうございます。話をすごくクリアに分けていただきました。日常的につながる仕組みとイベント的に非日常のところと日常のところ、分けて考えたほうがいい。すごくいい話ですね。今、仕組みとして、大学連携推進法人というものを立ち上げて単位を共通化するというふうな仕組みがありますよね。これを活用された大学はありますか。

薬袋さん：目白キャンパスの近くの大学との連携はしています。

市長：これ他大学との、国公立とか私立とか関係なく、その地域の中でつながって、例えば、究極的に言えば事務を共同化するとか、単位を共同化するとか、いろんな連携できますよねということを促していくための推進法人というふうなものを国としてもバックアップしているというふうなのがあるんですけど、事務の共通化というのはもうほぼちょっとなかなか難しい話だと思うんですけども、入り口の、今、授業の単位を共通化するというのは項目の1つに入っているはずなんです。ですよね。

でも、これは、まだ3大学では1回もやったことない感じですか。

すごく面白いですね。先生方がこれだけ盛り上がってやろうじゃないかという、テーマは多摩学と書いてあるんですけど、これは何ですか。いわゆる多摩区に関する事を勉強しようということですか。

お願いします。

佐藤さん：すみません。専修大学の佐藤と申します。

ホップを育てております。昨日までちょっと能登島でも育てているので、飛行機が飛ばなくて深夜に帰つてきたのでふらふらなんんですけど、授業の話なんですが、少し前にS D Cのカラフルカフェに出させていただいたときにもやっぱり話になって、それで私たちはいろいろ勉強をするんですけど、多摩区のこのいろんなまちづくりの活動とか、ここで活躍している人がどんな思いでどんなことをしているのかと勉強する機会が全然ない。まずは専修大学の全学公開講座で多摩学というのをつくろうというので盛り上がったときがあったんです。そのときもすごくいいなと思って、申請しようしたら、ちょうどタイミングが終わっちゃっていたんです。

来年は間に合わないので、再来年にそういうのをつくろうというのをちょうど我々でも話をしていたところだったんですけど、それは、だから地域の方たちにもゲストレクチャーとして、いろいろ今の取組を教えてもらったりするという考えだったんです。アイデアです。今日、薬袋先生とかいろいろな先生とお話を伺っていて、そうか、これは各大学でもいろんな研究とかまちで活動をしているので、そういうのも教えてもらって、だから地域の方と3大学のそれぞれの先生方の取組を勉強しながら、では僕たちはどんなことをやっていけるのかなという入り口になるような授業をして、そしてここでは研究・教育センターとなっていて、教育でまず入り口で、その後は卒業研究とか研究室でこの多摩をフィールドに、ここで勉強したことを生かして活動して、今度その報告会をやろうみたいなというようなことをちょっと話になったので、そういうのをぜひ取り組めたらなと思っていますので、よろしくお願いします。

市長：ありがとうございました。ちょっと勘違いしていたかもしれません。川崎学というのが実はありますて、川崎学は、実は川崎の歴史について学ぼうというふうなのはあるんですけど、そういうことではなくて、多摩区の今の地域課題というふうなのをしっかりテーマ別に掘り下げていくという形ですか。

佐藤さん：それもぜひ入れたいですね。地域史のいろんな歴史から始まって、今そしてこれから先と考えて

いける、そんなのがいいんじゃないかなと。15回ではとても足りなそうな気がしますけど。

市長：なるほど。

薬袋さん：長いことやっていく、大学の中で。

市長：多分恐らく歴史の話もあれば、地域のこの多摩区の課題というふうな、交通の課題だとか高齢化の課題とか福祉の課題とか、もうテーマは事欠くことはないと思うんですけど、そのフィールドの中で勉強できるということを3大学で決めて、プログラム、カリキュラムを組んで単位も取れるようにしていく。どうですか。大学の事務局を担っていただいている方に、ここは結構キーだと思うんですよね。何か急にトーンがちょっと暗い感じがしますけど、大丈夫でしょうか。ちょっとコメントいただいてもよろしいですか。

じゃあ水沢さんからいいですか。

水沢さん：そうですね。単位の共通化であったりとかというところは、本学は実は目白のほうでは実際に取り組んでいるf-Campusというんですけれども、早稲田大学さんとか学習院大学さんとか立教大学さんと単位の共通化というのは仕組みとしてありますので、やってやれないことはないのかなと思いますけれども、実際にやるとなるとどうなんだろうなというのはちょっとこれから検討課題かなと思いますけれども、やってやれないことはないと思います。

市長：なるほど。それぞれ各大学からちょっと聞いてみましょうか。今の温度感をちょっと確かめたいみたいな。

二宮さん：専修大学です。

専修大学も千代田区のほうで単位の交換ですか共同開講の授業ですか、そういったことはやってはいますので、スキームがないわけではないというふうなことで、多摩でも同じような形でできれば面白いのかなとは思っています。ただ、実際にこれをやるとなると、またちょっといろいろ詰めていかないといけないところもあるので、その辺りはいろんな方と相談しながら進めていければというふうに思っております。

市長：ですよね、と思いますけれども、続けてお願いします。

福岡さん：そうですね。ここがすごく盛り上がっていたというのは、大体教員は盛り上がるものなので、ここに来られている先生方ですのでそれは盛り上がるし、あと単位互換に関して、それがまた皆さん自分の学部に持ち帰ると学部の中でそんな貴重な卒業単位をどうするんだという話にもなったりもします。何というか、ですのでやっぱりゼミ単位、先生方は自分の自由が利くゼミの単位の中にどう組み込んでいくかというのが割と現実的なかなとは思っております。やっぱり学部の中のカリキュラムですので、大学の中で卒業としてどう取り扱うかというのがすごく議論になってしまって、結局そこで止まってしまう。ですので、多分これまでゼミ単位でやられていたんだなというような印象はございます。すみません。

市長：なるほど。急にちょっと顔色が何か微妙な感じになってきておりますけれども、先生方から。

黒岩先生。

黒岩さん：多分ここにいらっしゃる先生たちと話すと本当に楽しくて、こういうのをやりたいなというふう

になるんですけども、大学の中で社会連携をやる教員というのはやっぱり限られていて、なので、いつでも同じような教員が何かそれに関わって、多分私たちの働きとしても認めてほしいというのは、どうしてもボランタリーになりがちで、大学全体として何かやっていこうというのはやっぱりなかなか難しさがあるので、でもいかに1人でも多くの教員に関わってもらうかみたいな、そういうところも必要で、ゼミ単位というのもそうなんんですけど、共通事業も何か少ない人数で回していると、本当につまらないものになってしまふので、そこら辺はやっぱりもうちょっと私たち自身、教員自身も何かもうちょっと巻き込める仕組みみたいなものを考えていく必要があるのかなというふうに思いました。

以上です。

市長：ありがとうございます。先ほどこちらのテーブルで福岡さんがコミュニティバスという話をしていましたね。何かリアルに人を動かせないとなかなか連携なんか進まないぞというコメントをされていたと思うんですが、ちょっとコメントいただいてもいいですか。

福岡さん：そうですね。ここでお話しさせていただいたのは、どこかのコミュニティバスというのがありましたので、結局、何らかの企画をやったとしても、例えばこういう場に出てくる人たちも、先生方は専門をやられて、学生さんも専門の方、いざ大学の中での事務でこういう場に来るにしても、じゃあ誰が出るんだとか、どういう話をするんだとか、やっぱり場の設定をしてもそれを望んでいる人たちの場でしかない。そういうじゃなくて、例えばコミュニティバス、例えば駅と3大学を結ぶ、そうすると兼任講師の先生方も、次、明治の後、専修大学に行くのはそれに乗れる。あと学生も、その中でじゃあ駅に行くからこのバスに乗ろう。その中でじゃあこのバスは日本女子大も行っているんで、じゃあそこのサークルの人たちと話そう、ゼミで話そう。

1つの何てことがないただの空間、密室をつくることによって、その中から何か生まれてきますし、実際に何かを設定してそこに参加する人というのは一部だけれども、日常的に便利なもの、ツール、密室が、移動手段があればそこでつながるんじゃないかというような考え方。当然地域の人たちも、じゃあちょっと専修大のほうに用があるから、あの山がきついんだよね、そこに乗って、あのバスに乗っていこうという、何か結構難しいことではあるんですが、そういう最初からその場があつて、その中から生まれてくるものを拾い上げていくというのがいいんじゃないのかなと思いました。

市長：なるほど。これは、課題感はあるにしてもすごくいいお話だなと僕は素直に思いました。

先ほどちょっと触れた大学連携推進法人の話もそうなんんですけど、あれ、法人をやると何ができるようになるんですかというのは、実は施設の共有化みたいな話もできるようになってくると。例えば今日も私たちも専修大学のサテライトキャンパスをお借りしていますけれども、何かほかの大学のところも、いろんな条件はあるにしても借りられるようになってくるのかというふうになってくると、それをお互いの大学が施設間共有みたいなのができると、先ほどのコミュニティバスで人を回すのもそうかもしれないし、人が近くにいたら、じゃあここでちょっと今日は30分ぐらい勉強させてもらおうかなとかというような、そういう使い方もあるかもしれませんよね。

何か自分、自問自答してしまいましたけど、いや、実は先週も富士通さんが本社が川崎市に移ってきて、川崎駅前である施設を造ったんですけども、イノベーションハブみたいなもの。そこは社員じゃなくて誰でも登録して、大学生でも学生さんでもオーケーですと。いろんな方と研究者の人たちがそこに登録して、静脈認証を1回登録すれば無料で使えると。結局何を目指しているかというと、そういう交流だとか接点をつなげることによって、それぞれの企業価値をもっともっと上げていこうというオープンイノベーションの考え方ですよね。だから施設もそうだし、人の交流をつくっていくというこの3大学のというふうなのは、

講座でもそうだし、施設もそうだしというふうなのがいかにそこに挑戦できるかというのは1つ面白いチャレンジかもしれませんよね。本当に事務局的には非常に大変な、変なことを言ってくれるなということかもしれませんけれども、お互いの大学の価値を上げていくというのはすごく選ばれる大学になってくるんじゃないですかね。なるほど。ありがとうございます。

こことここ一緒ですね。それから、先ほどイベントと日常の話を先ほどしましたけれども、非日常のイベントなんかで3大学の回る機会をつくるというふうなのもいただきました。大学ブースの出展や事前準備での交流も期待できる。これは多分学生チームですよね。学生チームからちょっとこれ補足していただいてもいいですか。

事務局：誰でもいいですから、大学からお願いします。

大塚さん：学祭において、大学の主に結構サークルのブースとかが多分学祭は多いと思うんですけど、それぞれ3大学の大学のブースを出展するとか、あといろいろブースじゃなくてもいろいろ催物をするとなったら、事前の準備の段階で3大学の学生同士で交流する機会というものが生まれるんじゃないかという話をしていました。

市長：物すごく楽しそうですね、それ。学祭をほかの、すみません。専修大学の方、ほかの2大学の学祭に行なったことはありますか。

前川さん：ないです。

市長：明治の方はいらっしゃいますか。明治の方はほか2大学に行なったことありますか。なし。日本女子大学、ありますか。ない。ということで、完全独立型ということなんですけれども、行ってみたい。そのハンドルは何ですか。やっぱり行っちゃいけない感があるんですか。

前川さん：入りにくいなという。自分の大学じゃないという、何か非日常感ですごく入りにくい気もするし、行ってみたい気持ち半分、何かまあ自分の大学だけでいいかなという気持ちも半分ぐらいという感じです。

市長：確かに僕も何か大学にお邪魔するときは、入っちゃいけないところに入り込んでいるような気がして、不審者とも思われるんじゃないかという、そういうイメージがありますよね。学生さんでもそう思うんですね。もう大きくうなずいていますけど、先生方はどう思われます。そういう感覚はありますか。

藁袋さん：いや、私が学生のときには、当然、他大学の学祭というのは遊びに行くための学祭だと思っていたので、今の学生の皆さんと、私たちはそうですよね。ナンパしに行くとかいろいろな目的を持っていくためのものが学祭だった。

市長：そうですよね。そういうイメージですよね。

藁袋さん：ちょっと気になった。この間、先日、娘の学祭に行って気になったのは、学祭に行って交流するというよりは、何か屋台がいっぱい出ていて、そこで高い買物をするイメージになっちゃっていて、それだと確かに何か行くモチベーションは別のところ遊びにいったほうがいいかなという気がしちゃうので、その辺、だから学祭の在り方がもしかしたら変わって、私たちのときはあれですよね、例えば私も東大に行って、

みんなで何かモックアップを作つて、建築なので、実際に作つてみて、授業では物を作る体験はないけど、文化祭のときには物を作る体験をさせてもらって、もっと勉強しなくてはという気持ちになるような、何かそういう場があつたんですね。だから何かそういうふうになるときっともっとみんなお互いに行ってみようかなとか、一緒に今年はじゃあどこどこの大学のブースで何々出しているのかなとなるのかな、どうでしょうね。

市長：なるほど、なるほど。何かイベントとかで自分の大学以外の学校の生徒さん、学生さんと何か関わる機会はありますか。ない。

田中さん：たまなびというのがありますて、それで関わつたり、あとボランティアサークルだと結構ボランティア同士で回つたりします。

市長：でも、普通はないという感じなんですか。

田中さん：そうですね。何かサークルとかに属していない限りはなかなか難しいです。

市長：なるほど。大分大学もさま変わりしていますね、時代で。ちょっと事務局が分からない。ちょっとコメントをいただいてもいいですかね。こんなに、でもやっぱり結構それぞれの大学となつてゐる感じですかね、雰囲気は。学祭もそうだし、あまり他大学との交流というふうなのが今はなかなか生まれづらくなつてきている感じですか。何でなんでしょうね。ちょっとコメントをいただいてもいいですか。何かこのもやつとした不思議な感覚をみんなで何が原因なのかということをひもときたい部分があります。

薬袋さん：コロナが。

市長：コロナですね。

薬袋さん：大きかつたんじゃないかな。お互い交流することがね。

二宮さん：コロナで文化が断絶しちゃつたという。

薬袋さん：失ちちゃつた。すごい。

二宮さん：コロナで今まで各サークルだとか、団体が築いてきた文化だとか、そういった伝統といったものが一度そこでリセットされてしまつたと。そこからまた一から立ち上げていかなければいけないというのにかなりのマンパワーだとか、そういったものがかかつてきつていて、やつぱりちょっとコロナで数年間活動できなかつたというのはすごく大きいのかなと思っています。

市長：そうですね。それはすごい言われますね。コロナの4年間でもう1年生から4年生まで、活動が4年間停止したらもうそのままノウハウがゼロになっちゃいますものね。

薬袋さん：それプラス、いい面で言うと、例えば我々の分野だと、私たちの頃は、男の子は理系、女の子は文系だったから、インカレサークルが多かつたんですね。でも、今、多分その垣根がなくなつてゐるから、

インカレサークルに入るモチベーションが下がって、多分減って、そこへコロナがやってきたみたいな形なので、ある意味よい面なんですよね、男女がそれぞれ性に関係なく学びをするようになったといふことの上に今の新しい課題が出てきた可能性と考えると面白い展開が次ありそうですね。

市長：なるほど。3大学でイベントをお互いにブースを出し合うとか、準備段階から交わっていくといふうなのを実現するに当たって何か課題となるものはありますか。

藤巻さん：共有する場がやっぱりないというのがあったんですけども、先ほど事務局の方からコミュニティバスのお話もいただいたので、そういうことだったり、施設の設備が使えるようになると、何か結構解消はされるんじゃないかなと思いますね。

市長：なるほど。ＳＤＣ、何かうまく、どうですかね。交流の拠点になり得ますか。お願いします。

堀川さん：多摩区ソーシャルデザインセンターの堀川です。

今、すごい機会とか場所というお話をいただいて、場所ですと多摩ＳＤＣの事務所も使っていただいていると思いますし、あとこういった場所もお貸しいただけるとうれしいですし、あと場所と、やっぱり私的に大事だなと思うのは、きっかけと機会がすごく大事だなと思って、ありますよというのだけじゃなくて、ここがあるので1つ目指してちょっと一緒にやってみませんかというような呼びかけができると、結構参加する側としても参加しやすいのかなと思っていて、私たちでいうと5月に知り合って、いつもお手伝いもいただいているんですけど、登戸・たまがわマルシェというイベントがあったりですとか、あとは月に1回こども食堂を、コミュニティ的な、貧困支援というよりかはコミュニティ的なこども食堂もやっているので、そういう活動にぜひ本当に大学の垣根を越えて来ていただいて、そこでお話をし、そういう研究をやっているの、じゃあそういうのもやってみたいというようなこともできるのかなと思っているので、機会が1つ大事なのかなと思いました。

市長：なるほど。

堀川さん：一緒にできます。

市長：ありがとうございます。すごく力強い、今、ＳＤＣに関わっていただいている学生さんは60人ぐらいいるんでしたか。

堀川さん：大きいイベントのときだと150人ぐらいは一気に集まります。

市長：その中で今の今日集まっている3大学という割合からすると相当少ないと、僕は聞いたことがあります。

堀川さん：そうですね。結構地元に住んでいる学生が多いので、実際に3大学に通われている方は結構少ないですね。

市長：どのぐらいですか、ざっくりイメージ。

堀川さん：L I N K s さんとかも合わせて10人ちょっとぐらいだと、10%ないぐらいです。

市長：10%ないぐらい。ということで、かなり大きな規模で学生たちがS D Cに関わっているけれども、3大学の学生さんというのはあんまり関わって、現状ではそれほど大きなパーセンテージではないということなので、そういう意味では連携のきっかけというふうなので、S D Cの場所であったり、きっかけ、結びつきをつくってもらえる。人をつなげるというのがS D Cの大きな役割の1つということでもあるので、そういう形できっかけをつくってもらえるとすごくありがたいなと思うんですけども、堀川さん、堀川さん以外でもS D Cのメンバーの方からちょっとコメントをいただいてもいいですか。

仲西さん：きっかけという意味で言うと、私たち5月、4月ぐらいに登戸・たまがわマルシェというイベントを開催しているんですけど、今日いらしているんですけど、石井さんのゼミが実際に登戸・たまがわマルシェに参加してくださったりとか、そういうところ、地域のイベントとかで私たちのそのマルシェもそうですけど、ゼミ単位とか、さっき学生が挙げた3大学が連携してプロジェクト、何か1つのプロジェクトを立てて、そこで出展したりとかするのはすごくつながりはできるのかなというふうには。

市長：ちなみにそのマルシェでは各大学からブース出展みたいなことは今までありますか。

仲西さん：はい、あります。明治大学さん、あります。

市長：ある。じゃあそれも物すごく面白いですね。3大学連携のブース出展なんかしてもらうと、先ほどおっしゃっていた準備段階から交われる。ぜひそのきっかけをつくっていただくとすごくいいんじゃないかな。学生たちのカウンターパートというのは、ここに集まっているメンバーからどんどん発信できる感じなんですか。すばらしい。ぜひよろしく。

何かここでもう解決できちゃったような話になっちゃっていますけど、でも1つのきっかけとして、非日常の第一歩としては、まずたまがわ・登戸マルシェを活用して第一歩を進めるというのも、これもすごくやれるぞという、第一歩としては物すごくいいですよね。S D Cがハブとなっていただいてということではすごくありがたい話です。

ほかに、ちょっとコメントでこれは言っておきたいという方がありましたら、お願いします。

山本さん：明治大学の山本です。

入り口も大事なんですけれども、やっぱり出口が大事で、今のマルシェというのも活動の広くという形になりますけれども、ぜひ多摩区さんなり多摩区S D Cさんに機会を設けてもらって、このエリアでいろんな研究をやっているんです。その卒論でも卒業設計でも修論でもいいので、相乗り方式で、もう必ずやらなければならないということではなくて、その成果を発表する機会を設けるということになると、地域の人たちにいろいろと迷惑をかけたりとか、あるいはためになることであったりとかというような、そういう調査をこれまでやってきていますので、その機会を、例えばですけれども、3月の卒業式の手前だったらみんな戻ってくるから、そういうところで、例えばここという形で発表の機会を設けると、そこからこの次がつながっていくのかなというふうに思います。

市長：物すごくありがたいお話ですね。

山本さん：これをまた持ち回り式にやっちゃうと、結構何か加熱しちゃったりとか、あるいは何か負担にな

つちやっているとかという、これはやっぱり無理しないでやっていくのが大事だと思うんですよ。それがちゃんと多摩学という形で知の蓄積になっていくというようなことも多摩区さんなり多摩SDCさんのほうで成果にもつながっていくみたいな感じで、それぞれのWIN・WINの形になっていくのがいいかなというふうに思うんですけど、いかがでしょうか。

市長：いや、すごくいいですね。もうとにかく出口のない話というのはやめたほうがいいと思うんですよね。ですから必ずこういうふうな成果を出すとか、こういう結果がついてくるというものじゃないとあまりやっている意味がないので、誰も共感を得ないというふうに思います。

先ほどご紹介したSDGsのプラットフォームで350個ぐらいのイベントがというか、プロジェクトが動いているというのは、ほとんどが企業さんが関わっているというのは、必ず成果を出しているというか、こういうことをやって、ただほわっと何かいいことやりましたじゃなくて、自分たちに関係するところの得意技をどうやって世の中に貢献するかというのを確実に出口のお話をしっかりとやるから動いて、最適なパートナーを探しているんですよね。

ですから、こういった話もぜひ企業の皆さんにもぜひお声がけをさせていただきたいと思います。例えばこういうテーマでということであれば、すごく企業から言われるのは、学生さんとの接点をつくってくださいというのはむちゃくちゃ言われます。最近は大学生だけじゃなくて、もっと高校生にとか低学年化しているんですけど、より大学生、高校生たちの接点をいかに持たしてもらうかということを、私たちもすごく求められているので、こういう出口の発表、研究発表とかというふうなのは地域の人たちだけじゃなくて、関係する企業の皆さんにもこういう説明会ありますよと、結果発表がありますよといったら、その関連する人たちにもお声がけできるというふうな形で、お互いWIN・WINになっていくというふうなのがすごい仕組みなのではないかなと。

無理をしないのもいい話ですね。持続可能にするためには一気に頑張ってやり過ぎないこともすごく大事かなというふうに思います。ありがとうございます。

ほかに積み残しているよ。今日終わりではないので、このことを、出てきたアイデアを、次はどうやって実現させていくかというフェーズに入っていきますので、その前にしゃべっておかないと。お願ひします。

山本さん：せっかくこれを用意してきたので。皆さんの手元に表裏で、学生たちによる地域協働の形、これ様々な形があって、ここで言いたいのはちょっとしたお金が大事なんですね。一番上のは、近くの中野島小学校についてこの間やったことなんですが、つないでいただいたのは川崎市役所です。お金を出したのは大学、明治大学、去年は川崎市役所から100周年ということでたっぷり予算がついたんですけども、こういうことをできた。次は、これはたまたまなんですけれども、小田急の関連会社がちょっとしたお金を出して、それで生田の商店街で食べていたんですね。どんな情報かというの、これがたまたまコロナで商店ができなくなったりということで、今度学生たちがその調査の成果を発表するという機会をSNSでやっていった。これがコロナのときにはすごく役立ったんですね。最後は、これは川崎フロンターレが来るということで、これは模型を作るのにやっぱりお金がかかるんですよ。これは設計事務所がお金を出してくれました。

という形で、ちょっとしたお金がとても重要で、さっきの出口のところは、こういった研究にならないんですよ、これ、この3つとも。後ろのほうにあるのは研究になっていくんですけども、活動の発表という形で今の企業の人たちも入ってきてもらえると企業のPRにもなりますし、ここでまた新しい偶発的な出会いというところがあるんで、イノベーションを起こしていく機会ということで、ちょっとしたお金を企業と連携でという形で。

市長：いや、実は先ほどご紹介した富士通の高層の上のほうの広いイノベーションスタジオ、あれ発表をし

ていただくのもこれも無料なんですよ。施設も無料で借りられるということなので、そうすると必然的に面白い人たちが集まっているところでプレゼンができると。結果発表ができるというふうな話なんで、多摩学なんんですけど、場所は多摩区だけに固定する必要はないと思うんです。むしろアウトリーチして、企業の人たちがいるところに向かっていくこともあるでしょうし、ぜひそういうところなんで、富士通さんだけじゃないです。東芝さんも同じようなものを持っていましたし、味の素も全部オープンなところを持っていましたから、そういったところをつなげていくというふうなのも学生さんたちにとってもいい刺激になると思いますし、企業も求めている。あるいは先ほど言われたようなスポンサーにもなってくれるかもしれないという、そういううまいつながり方というのならばあるかもしれないなというふうに、今教えていただきました。ありがとうございます。

ほかございますか。お願いします。

佐藤さん：ちょっとずれていってしまうかもしれないですが、せっかく印刷してきたので、我々の活動の報告をさせてください。

少しこれも何か活動しているうちにだんだん地域に、まちにつながってきたなと思っているんですけれども、去年からホップ栽培を学内で始めて、それで最初は10株で、去年は200グラムしかホップが取れなかつたんですけど、もうちょっと頑張りたいというので、今年は50株やって、そうすると学校内だけじゃなくて、少し地域の方にも話が進んでいって、ホームステーション稻田堤で育てていただいたりとか、登戸の駅前の園芸部のところにも持つていっていかせていただいたりとか、それからご自宅で育ててくれる方が出てきたりとか、それでだんだん話が進んできて、僕は災害の研究をしているのでよく石川県に行くんですけれども、県庁の担当者にホップを育てているんだというと、能登でもやってくださいよと。ここで育てているホップを自動車部の学生さんたちと一緒に能登島まで持つていまして、それで能登でも育てて、今年なんと1,700グラム、ホップが採れまして、このすぐそこにモンキーレンチというお店があって、そこに持つていくと大体今年200リットル、600瓶ができるので、そのラベルデザインを今やっていて、これ途中なんですけど、これがラベルの案なんです。

多摩区の中の活動というのがだんだんほかの地域につながっていくというのもあると思うし、今年は能登とつながったので、能登の人たちに避難のこととか、災害のこととか、今の仮設暮らしこととかをオンラインで中継して、生田の避難所会議の人たちに教えてもらって、終わった後はみんなでビールで乾杯しようということになってきたので、何ですかね、ここの地域の活動がほかの地域につながっていったり、またはほかの地域から学んだり、多摩学なんだけど、多摩のことだけじゃなくて、ほかのことも取り入れていって、ほかの地域ともつながっていくというのも要素かなと思ったりしていて、それで、この1つのホップが題材なんですけれども、50株今年あると株分けということができて、来年は100株、これまた分けると200株、400株どんどん広がっていくので、いろんなところに持つていけると。それがばらばらになっていっちゃうと分からなくなるから、それをつなぐ何かアプリ、コミュニケーションツールをつくろうとか、水やりが大変なので、水をやると1ホップ、1ホップみたいになって、何か20ホップたまると1瓶サービスで、そういうのが例えばこの地域通貨のいろんな飲食店のいろいろな山本先生の取組とつながってきたりしてもいいかもしれないし、そういったことをやっていこうとすると、我々大学だけではなかなか1つの研究室だけではちょっとできないので、そういう何か連携する組織を地域の方とか、あるいはほかの大学の方とかとつくって、それでホップだけじゃなくて、ほかのこともいろいろやっているわけですけど、何か大学の活動を少し主体的に捉えた組織というのもあってもいいんじゃないかと。どうしても地域と大学の連携となると、地域からの大学生の要望となるとボランティアみたいになってきて、だんだん無償労働力みたいにされることもあるので、大学の活動を少し主体的に位置づけた地域との連携の在り方みたいなこともあるのかなと思って、そんなことでちょっとどこにどうなっていくか分からないんですけど、ホップでやっています

ので、よろしくお願ひします。

市長：ありがとうございます。すばらしい取組ですね。ありがとうございます。こういうような話を各3大学のところで、先ほどやっぱりゼミ単位でやったほうがハードルが低いんじゃないかという福岡さんのお話がありましたけれども、3大学のこのテーマでこういう研究をやっていて、つながって、それぞれの大学のゼミで、横つながりでこういうプロジェクトを組めるというふうな話というのは、今、先生からおっしゃつていただいたような、そういう多摩学が組めるという可能性があるということですね。

佐藤さん：そうです。僕もたまたまちょっとここら辺に勤務することになって、だんだん愛着が湧いてきました。今年の夏は、今、山本先生に印刷していただきましたけど、裏側に域学連携シンポジウムということで、区役所で3大学、あとは慶應のSFCのまちづくりの先生に来ていただいて、100名以上集まって、終わった後は中華屋さんで40人ぐらいでしたか、四、五十人で飲み会をしたんですよ。これもまたいい交流だったんじゃないかな。こういうのを少し続けていきたいなと思っているんですけども、ぜひ何か区とか市とかにもこういう取組をしていただいて、何かうまく使っていただけたらと思っていますので、よろしくお願ひします。

市長：いや、すごいいいですよね、区長、これちょっとコメント。

区長：シンポジウムのほうは出させていただいて、ちょっと飲み会のほうまで行けなかつたんですけども、本当にいろいろなところで関わると思います。あと、先ほど来からSDCのほうの活動もいろいろと中間支援がSDCの役割ですので、SDCのほうを活用していただきたいと思いますので、ちょっとあんまり負担になっちゃうといけないんだけど、ぜひお願ひしたいなと。私も地域を回っているいろんなお話を聞いていて、ああ、こういう人がいる、こういう人がいると頭に浮かんできますので、みんなそういう人がいっぱいいると思いますので、地域の方、いろいろいろんなところを介してご紹介もできると思いますので、区としてもいろんなことを期待したいなと思っております。

市長：はい。ありがとうございます。飲み会に行かなかつたという、飲み会がすごい大事なんですよね。飲み会でみんなでぐつとつながるというふうなのがありますから、ぜひ。

区長：来年はぜひ心がけます。よろしくお願ひします。

市長：よろしくお願ひします。本当にありがとうございました。

＜総括＞

市長：今日はちょっともう時間になりますので、まとめという形でさせていただきたいんですが、次回の多摩区のデザイン会議に向けての大分整理されたのかなというふうに思います。多摩学の研究センター、こういう共通化みたいな話と、それからその話の最後はやっぱり出口を意識した山本先生の話ですよね。そのことをしっかりと意識した上でこの多摩学というふうのを一気通貫でやっていく仕組みづくりというのが必要なのかなということと、もう既に具体化に向けていけそうなものがたまがわ・登戸マルシェ、できれば3大学で共通ブースみたいな形をやれるプラットフォーマーとしての多摩SDCのつなぎの部分というふうなのにぜひ期待をしたいなというふうに思っています。

それと、大丈夫かな。あと拾えていないところは次回のところでもう少し言い切れなかつたなというふう

なものがさらに増えていても全く問題ないということだと思いますので、次回に取組を進めていきたいと思います。これ本当にすごくいい形でまとめていただいて、すごく見やすいので、多分ここを皆さん多分写真撮って帰っていただいて、次の会議のときにはここから始まるというようにしていただければありがたいなというふうに思っています。

ちょっともうまとめの言葉に入っちゃいますけれども、今日は本当に忙しい中、ご参加をいただきまして、誠にありがとうございました。大学の先生方と、それから大学事務局のキーになる方たちと、そして実際の学生さん、ＳＤＣ、この一堂に会してということというのは画期的だと思いますし、これから20年を超えて本当に今までの課題感というふうなのが、冒頭説明がありましたけれども、この課題感を越えて、もっと新しい価値を生み出していくと。それぞれの大学がこういう取組をすることによって、それぞれの大学も価値を上げていく。そして通っている生徒さんたちも、こういう魅力的な大学にぜひ行きたいというような形が全国に知れ渡っていくという形になれば、結果的に地域も非常に潤ってくるということだと思いますので、ぜひいい循環をこれからも回していきたいなというふうに思っています。貴重な皆さんご意見をいただいたことに改めて感謝を申し上げたいと思います。

区長から一言ありますか。次の意気込みも含めて。

区長：本当に多摩学、私も学びたいなと思いますので、本当に今後期待しております。ありがとうございました。

市長：どうも皆さんありがとうございました。

司会：福田市長、参加者の皆様、大変どうもありがとうございました。

進行にはちょっと入っていなかつたんですけども、今日グラフィッカーのお三方が大変すばらしいグラフィックレコーディングをしていただきました。ちょっとここでお3人から少しづつ、ちょっと今日の作画のコンセプトですか、描いた内容とか、お話をいただければなと思います。お願いいいたします。

岡田さん：グラフィッカーの岡田と申します。

そうですね。作画のコンセプトということで、やっぱり多摩区さんは緑が基調ということで、緑をベースにしつつ楽しくなるようなところをちょっと意識しようかなというところで3人で話していました。皆さんのお話を聞いていて思ったのが、やはり持っているポテンシャルとかはすごくいっぱいあるのに、そこをつなぐところができていないというところがあったのかなと思うので、バーチャル、リアル、両方ともそういった学びを地域とつなぐみたいなところができるといいのかなというところで、皆さんとても言われていたのと、あとちょっと意外だったのが、イベントとしての非日常的なつながりというところも、そこもやはり活用していこうという話が出たのがとてもいいなと思いました、授業以外のところでも学びはたくさんあると思うので、そこでいろいろ皆さんのスキルとかナレッジが交流されてもっといいものになっていくといいかなと思いました。ありがとうございました。

斎藤さん：本日グラフィッカーを担当しました斎藤と申します。

私は、日頃は企業と企業を競争させるみたいなところを実は業務でやっているんですけども、なかなか企業の中の連携も難しいですし、企業間の連携も難しいなと思っていたので、そう考えると、もっと本当は企業を飛び越えての連携というのがいつも必要なんじゃないかと思っていたので、今日の皆様のお話というのは、すごく非常に感銘というか、気づきがすごく多くあったなと思います。

つなぐというところとかというのは、やっぱりつなぎ切るみたいなところの、何か主体性を持ってつなが

らないといけないのかなというのをちょっと皆さん、何というんですかね、会話の中から結構そこは印象的に残りましたので、なるべく皆さんのご意見というのを拾わせていただくような形でちょっと描かせていただきました。今日はありがとうございました。

肱岡さん：今日グラフィッカーを務めました肱岡です。ありがとうございました。

そうですね。今日すごく印象に残ったのは、やっぱりコロナという断絶というキーワードが最後に出てきた中で、つながり直すということが今起きているんだなというふうに思いました。なので、今の形に新しい新結合というか、つながり直すということがどんどん日本がよくなつて、世界がよくなつていくまずこの第一歩がこの場で生まれたのかなというふうに思つていて、こうした場にグラフィックで並走させていただいてとても感謝しております。今日書いたことを皆さんぜひ、この場に参加されなかつた方にも、こんなことを話してきたんだよというふうな会話のつなぎになればと思っておりますので、引き続きよろしくお願ひいたします。

＜閉会、写真撮影＞

それでは、今日はこれで以上になります、最後、参加者全員による記念撮影を行いたいと思います。